

## 問答草（一）

一、ぜいたく

甲「先生、私は近ごろまったく憂鬱でたまりません。どうにかならないでしょうか。」  
乙「あなたの憂鬱をどうにかしてあげる前に、私自身ここ二十年、一日だつて曇天でない日はない。その私の憂鬱をどうすることもできない。」  
甲「先生がですか……でもあなたには暗さなどちつとも見えません。」  
乙「ただ堪えているだけだ。道に生きようと志す者は、道を歩んだ上に朗らかになるうなどと贅沢な考えは捨てた方がいい。憂鬱は好きではないが……。」  
甲「考えが違っていました。」

## 二、難易

甲「先生、『光明』をもつとわかりやすく書いてください、でないといと広く人が読みません。」  
乙「君は読んでいるか。」  
甲「読んでいますけれども。」  
乙「それだけで満足する。」  
甲「でも、だれに見せてもむずかしいと言つて読んでくれませんか。」  
乙「君は論語を読んだことがあるか。」  
甲「あります。」  
乙「たやすかつたか、むずかしかつたか。」  
甲「難解です。」  
甲「『教行信証』はもつとむずかしい。容易なものは本屋の店頭にくらでもある。」

## 三、今日一日

甲「私もどうもお説教を聞いている時のような法悦が続きません。どうしたら続きますか。」  
乙「それはどうしても続きません。」  
甲「どうすればいいでしょうか。」  
乙「どうにもならぬことはどうにもなりません。そのなろうとする心をやめなさい。それが自力です。」  
甲「それでは、何もなくなりません。」  
乙「そんなはずはありません。感激が、法悦が、無くなったとて如来が消えますか。如来に生きることが主であつて、法悦は従であります。」  
甲「先生は、それでは、どういう心で仏前に合掌されますか。」  
乙「ただ念仏します。しかしこんな思いも出てきます。『み仏さま、私は今日一日生きのびさせていただきました。今日一日、至尊のお慈悲の中に生かされます。今日一日私のしたことが至尊のご冥見にかないますよう。至尊の前には十方正面であるように生きたいと存じます。今日一日、やっと大きなたまづきも過ぎさせてい

いただきました。私は今までも至尊を仰ぎ見ることができません。悔いなき一日を  
ありがとうございます。……私たちの過去は後悔のみであります。如  
来の前に一切を清算しきって、せめて今日一日真実なるものをまともに仰ぐこと  
のできる生活をさせていただきます。』

四、ただこれだけ

甲「私がみ法を求め、仏道に精進すればするだけ、私の周囲は私を圧迫します。」

乙「であろうとも、人がこの世に出たのは、ただみ法を聞き、み法を生きるためのみ  
である。」

五、生きる道

甲「先生、私は強く生きぬきます。どんなに苦しくても生きぬいて団の精神に生きま  
す。」

乙「ただ、心すべきは、強く生きるとは対立することでないこと、一切と融けるとは  
妥協することでないこと、対立は我執であり、妥協は無生命である。」

六、三とおりの人

甲「長い間失礼していました。まことに久しぶりです。もう一度聞きたいと思つて来  
ました。」

乙「よく来ました。長い間道草しましたね。道を生きる者に三とおりの人。

2

一、何か功利的な考えから(例えば地獄へ落ちたくない。極楽へ行きたい。)法を聞いて  
どうにかならうとしている者。

二、そうした悶えが解かれて満足すると、それからは「知った、わかった」となつて、  
聞法求道をやめる者、たとい聞いても一種の復習におわる。

三、なんらの功利的な願いがなくなつてからこそ、いよいよ本格的に求道する者。  
あなたはそのいずれでありたいか。」

七、現前の満足

甲「これから聞いてゆくと言いますと、満足はなくてもいいのですか。」

乙「ここに汽車がつくと言つて喜んでいても、何人かの人は乗らずに死んでゆく。今  
の世界がなんとか動いて景気がよくなるのを待っている者もその通り。信は満足  
である。現前の一念に大満足を得ないでは、仏法の底をたたいた者ではない。だが、  
世界は永遠に相対不完全である。」

八、因果と空

甲「仏教には、一面において因果を説きつつ、一面には一切空を説きます。この二つ  
はいかなる関係がありますか。」

乙「宇宙の一切は、ことごとく因果の関係によつて動く。雨が降るのも、花が咲くの  
も。しかしその因果関係によつてこそ、すべてが因、縁、果と生滅するのである。」

因縁、因果の一切諸法は、それゆえにこれぞといつて常住不変の実体がないから空  
と言うのである。空なるがゆえに、柳は緑、花は紅たり得て、生々發展してやまぬ  
のである。生々創造のままが空である。すなわち色即是空である。因果の上に出  
でたもうところの事仏、阿弥陀(報身仏)は、そのまま久遠の法身・理仏の現われな  
るがゆえに、八万四千の光明と衆生八万四千の煩惱と、本来空寂にして一体なる救  
いを成就し得るのである。」

## 九、墮落

甲「人間のいちばん墮落は何でありますか。」

乙「人間最上の墮落は自己衷心の声をごまかすことである。」

甲「自分の心の言うことを忠実に聞きさえすればいいのですか。」

乙「自分の魂の声をごまかしていることすらわからないのだ。ゆえに、人は声なき声、  
形なきものの心を聞かねばならない。それによつて自覚し、自覚した心の声こそ、  
自己衷心の声である。仏の声を忘れることこそ、人間最上の墮落である。」

一〇、日本はどうなる

甲「日本はどうなりますか。」

乙「知りません。」

甲「社会は変わりますでしょうか。」

乙「必ず変革されます。」

甲「それなら、日本が悪くなつたり、乱れたりしましょうか。」

乙「そんなことはありません。毎日よくなつていつています。安心して日本精神に生  
きるのです。仏教の理想が、日本国体といつしよになつて、そこに独特の日本を創  
造します。お互いに力強く歩みましょう。仏教の教団は嫌つても、大乘の真精神  
を肯定しない人はない。大乘日本の実現にお互いに生きましょう。」